

令和6年度 ふるさと府中歴史館くらやみ祭展

東京都指定無形民俗文化財(風俗慣習)

「武蔵府中のくらやみ祭」の 歴史と民俗

大國魂神社の例大祭くらやみ祭の開催にあわせて、「武蔵府中のくらやみ祭」の歴史と民俗について、展示紹介します。

あわせて、くらやみ祭を長年にわたって描いてきた、画家 綾部好男氏のくらやみ祭の絵画を展示します。

会期 令和6(2024)年

4月23日(火)～5月6日(月・祝)

(ただし、4月30日(火)は休館)

時間 午前9時から午後5時まで

会場 ふるさと府中歴史館2階くらやみ祭展示室(府中市宮町3-1)

【問合せ】

府中市 文化スポーツ部 ふるさと文化財課

電話 ; 042-335-4471 E-mail;bunkazai01@city.fuchu,Tokyo.jp

「東京都指定無形民俗文化財（風俗慣習）武蔵府中のくらやみ祭」

伝統ある祭の歴史をさぐる

府中の人なら誰でも知っている「東京都指定無形民俗文化財（風俗慣習）武蔵府中のくらやみ祭」（以下「くらやみ祭」と言います）。府中の街中がにぎわう大きな祭ですが、いつから始まってどういう歴史をたどってきたのか？ このお祭りにどんな意味や特色があるのか？ 意外と知られていません。

1 「くらやみ祭」の歴史

「くらやみ祭」の歴史は、古代武蔵国府の国府祭に由来すると考えられます。府中の地には、飛鳥時代から奈良時代にかけて、武蔵国の国府が置かれました。そして、平安時代、国府に「総社」が誕生します。「総社」とは、国内の有力な神社の祭神を一か所に合祀した社のことで、武蔵国では六つの祭神を祀っていたので、「六所宮」と呼ばれました。この国府における「総社」の祭礼が「くらやみ祭」の起源になりました。

鎌倉時代以降、六所宮は武蔵国でもっとも有力な神社として信仰され、「くらやみ祭」には多くの武蔵の人々が参加し、市も連携して行われていたことが史料から伺えます。さらに、江戸時代になると、府中は、甲州街道の宿場町として再生し、神社が行う「くらやみ祭」を府中宿の住民たちが支えるスタイルに変わっていきました。府中は、大都市江戸の西の郊外に位置するため、江戸に住む人々が「くらやみ祭」の見物のため、たくさん訪れるようになりました。このことは、この時期の名所図会・紀行文などからも知られています。

明治時代からは、神輿・太鼓の管理が旧宿場町の4つの町の人々に委託され、それぞれを担当した町が競い合いながら、祭を運営する新たな都市祭礼へと展開しました。昭和時代の戦後には、都市の近代化にともなう新たな課題を克服しながら、長い伝統の形を維持し、安全かつ盛大な祭礼へと展開を遂げ、今日に至っています。

2 「くらやみ祭」とは何か？

「くらやみ祭」は、大國魂神社(六所宮)の年に一度の大きな祭、すなわち例大祭です。かつては、真夜中に神輿が出たので、「くらやみ祭」と呼ばれるようになりました。4月30日から5月6日まで1週間続く祭で、5月5日午後6時の神輿渡御を中心に、多彩な演目が繰り広げられます。

そもそも日本の伝統的な祭の基本的なかたちは、神事(マツリ)と「付け祭」(にぎやかし)からなっていると言われていています。神事には、神を迎える・神を慰める・神を復活させるなどの意味があり、夜中に人が見えないところで、神にお出ましをいただくものでした。「神輿渡御」はその代表的なものです。

これに対して「付け祭」は、神のお出ましを人々が喜び祝う意味があり、これが、太鼓・囃子・山車・万灯などの活躍となります。「くらやみ祭」には、こうした古くからの日本の祭の形が伝承されているのです。

3 「くらやみ祭」の特色

最後に、このお祭りの特色をまとめておきましょう。

クライマックス(神輿渡御)が明瞭で、神事と「付け祭」のバランスもよく、盛りあがります。

夜間の神輿渡御をはじめ、古式の形態を多く残しています。

古代の国府の祭で始まり、その後の歴史の転換期を乗り越えながら存続・発展した歴史と伝統ある祭礼です。

神社を中心に、町方と講中(サポーター組織)の伝統的で広範なネットワーク組織があります。